

「三宅の太鼓」

瀬戸内 流青

伊豆諸島はダイバーのパラダイスだ。数年前まで私も趣味のスクーバダイビングを楽しむため、休暇のたびに渡島していた。近海とは異なる濃い青の海中はもちろんだ、品川ナンバーの車が走っているのに東京都心の雑踏とは似ても似つかないのどかな陸上も大きな魅力だった。そんな私が三宅島を訪れたのは、伊豆七島の別の島々をさんざん巡った後だった。もう島特有の生活に酔う楽しみにも慣れていたが、なぜか三宅島には特に惹かれた。二度目の訪問ですっかりその居心地の良さに惚れ込んで、三度目を楽しみに行っていた矢先、この島に防ぎようも無い天災が降りかかった。あたたかい印象だった三宅島は、連日テレビで思いがけない残酷な一面を見せ付けた。しかしそれはほんの一時期だった。自然の威力を私達の記憶に刻み込んだ島の姿は、やがてブームが去ったかのように画面から消えた。今日この瞬間も三宅島は、旅人はおるか住人でさえも容易に近寄れない不安定な大気に包まれて、東京本土から南へ百八十キロメートルの海上に浮かんでいるというのに。

三宅島での二回の滞在でお世話になった民宿のご主人は、島に伝わる郷土芸能「神着木遣太鼓」の名手でもあった。「神着」は「かみ

つきと読む三宅島の地名で、この民宿の住
所でもある。この伝統芸能との出会いを予想
すらしていなかつた私も、幸運なことに名人
直々のレッスンを受けた機会に恵まれた。伝
統の基本リズムは簡単そうでは上手に真似で
が難しく、一度聞いただけでは上手に真似で
きなかつた。大袈裟なくらいに両足を開く独
特なポーズに、女性陣は出だしから照れてし
まつたけれど、実際にバチを持つて和太鼓に
向かうと、多少大胆に感じるくらいに姿勢で
ない力が入らない。初めて叩く巨大な太鼓
は、中央をねらつて打つても思うような音も
出なければ思うようなリズムでも響いてくれ
なかつた。一見単純そうな太鼓が、技術、体
力、そして精神力までも必要とする極めて高
度な楽器だとわかつただけでも、若いダイバ
ー集団であつた私達にとつては大きな収穫で
あつた。

名人の叩く太鼓は、楽器自体が違うのでは
ないかと疑いたくなるくらいに圧倒的な音量
と響きで私達を圧倒した。大海原を進む船を
操る肉体はバランスよく鍛えられていて、バ
ネ仕掛けのような全身から湧き出る力が太鼓
の革に集中して驚くべき音色を生み出す。そ
の場で一緒に指導にあつてくれた息子さん
の腕前も見事だつた。お父さんの譲りの才能な
のか、そのスポーツ刈りの少年の体からは、
ちよつと想像できないような張りのある音が
はじきだされた。名人とはまた一味違う若々
しい響きに一同は聞き惚れた。

名人親子の美しい太鼓の音は、昼間のダイ
ピングで心地よく疲れた体と心の隅々まで染
み渡り、私達は澄み切った夜空の満天の星を
見上げながら、洗われたような気持ちで宿に
戻った。

たった一晩の楽しい思い出が、ふいに強烈
によみがえったのは、つい先月のことだ。
今私が住んでいる地域には、市民の有志で
結成された和太鼓サークルがある。引越して
きてすぐにはその存在を知ったのだが、お祭
の神輿の上でのお囃子くらいしか聴くことは
なかった。それが先月、夫となにげなく参加
したイベントのプログラムで、前座にその和
太鼓サークルの名前を見つけた。地元民とし
て我々は熱心にステージに見入った。そこで
彼らがクライマックスに演奏したのが、あの
懐かしい三宅島の木遣太鼓だったのだ。両足
を踏ん張って力いっぱい叩く太鼓の響きが次
から次へと私の記憶の扉を叩き、あの夜の光
景が蘇ってきた。
高い天井の殺風景な倉庫に大きな和太鼓が
ポツポツと置かれただけのところへ、ふらり
と案内してくれた民宿のご主人は、バチを持
つた途端に太鼓の名人に早変わりした。後光
が差す体全体から勇壮なりズムが繰り出され、
倉庫は一気に祭空間へと昇華した。伝統の太
鼓の音が、倉庫のトタン壁のすぐ外に満ちて
いる太平洋の波と共鳴して巨大なうねりとな
って私達を包みこんだようので、一瞬気が遠く

人々のあたたかい笑顔、低い軒に刻まれた気候の歴史、ブロック塀の隙間からのぞくたくましい野生の植物たち。三宅島特有の風景や、旅人達の心の故郷だった民宿の姿は、あの災害で灰に覆われてしまった。

先月、不覚にも私の頬をつたった大量の涙は、全島民避難を余儀無くされている三宅島の人々のあふれ出した思いが太鼓の響きに乘つて運んできたものだったのかもしれない。

現在も三宅島では日夜懸命な復旧作業が進められていくが、いまだに雄山の頂上からは人体に有害な二酸化硫黄を含む火山ガスが立ち昇っているという。

活発なマグマの上に横たわる日本は、もともと噴火や地震などの天災に見舞われやすい国だとわかつてはいても、いざ思い入れの深い場所が被災地になると、そこにあった生活、戻らない風景に誰もが愕然とする。

関東大震災から約八十年が経過した。そろそろ人口の密集する地域を大地震が襲うというまことしやかな噂が流れる巷で、私達は今日もいとおいとしい毎日を積み上げている。壊されたくないと思える日常を丁寧に過ごすことの大切さ。三宅島の太鼓が思い出させてくれないこのことを、ついうっかり再び忘れることのないようにしたい。

完